

大日本沿海輿地図

出典：国立国会図書館デジタルコレクション

(出版年：明治6年頃(1873年頃)) 書誌ID：000003281206

## 浚渫工事の工法

江戸時代の埋立工事は、人力施工(鋤簾引き)が主でありましたが、明治期に入り、蒸気による浚渫船が導入され機械化施工へと変貌をとげました。明治初期の浚渫船はバケット浚渫船(右図参照)が主流でしたが昭和初期に入り、大量に送泥できるポンプ浚渫船が主流となりました。また、土砂を運ぶ船の土運船も活躍しました。

- ※1 鋤簾引きとは
  - ・板鋤簾(右図参照)という道具を使用し、土砂をすくい取る。
- ※2 バケット浚渫船とは
  - ・バケットラダーで土砂を掘りながらすくい取る船。
- ※3 ポンプ浚渫船とは
  - ・カッターで地盤掘り、ポンプで吸入、送泥を行う船。



千葉港の航空写真(昭和63年(1988年)撮影)

## ★参考★

- ・法律の制定

大正時代となり、埋立工事が東京湾において盛んに実施されていました。このことを受け、環境に大きな影響を与えることから大正10年(1921年)4月9日法律第57号公有水面埋立法が施行されました。

## 埋立地のはじまり

海を土砂で埋め立てる埋立地の始まりは、天正18年(1590年)以降、徳川幕府による東京湾の埋立てが起源で、増大する人口を収容することや、干拓により農地の確保をすることが目的でした。

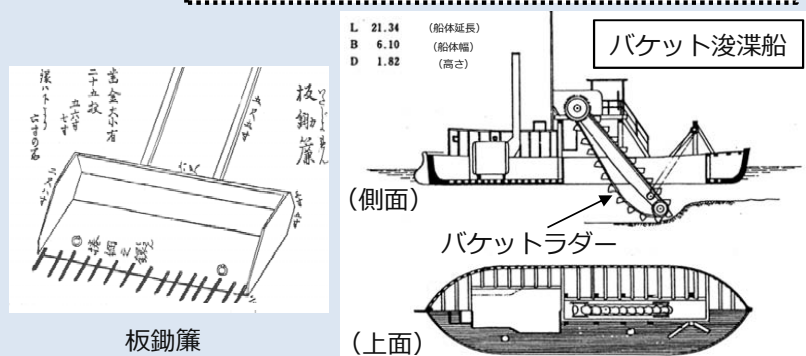
江戸時代末期になり、東京湾の航路は隅田川から流れ出る土砂により浅海化し、消費物資の運搬をするための航路の確保が困難となったため、航路の拡大と安全を確保するために浚渫事業を行い、その浚渫土砂を有効活用し、埋立地を作りました。(現在の佃島・月島・勝どき)

- ※ 浚渫事業とは
  - 港湾・河川・運河等の底面の土砂を取り去り、水深を深くすること。

【大日本沿海輿地図】(左図参照)

千葉県佐原市(現在は香取市)出身の伊能忠敬(1745-1818)の手で作成されたものです。

その後、左図を基に明治10年(1877年)『日本全図』が刊行され、明治17年(1884年)には陸軍参謀本部測量部(現国土地理院)の基本図となりました。



板鋤簾  
出典：農具便利論  
(出版年：文政5年(1822年))

明治初期の浚渫船  
出典：日本作業船協会 機関誌158号

## 【バケット浚渫船の歴史】

明治11年(1878年)宮城県の野蒜築港の港湾整備で最初に利用されたと言われています。

## 明治期の埋立事業

明治期になると蒸気船が導入され、船型の機帆船が沖に停泊して小船による内港との連絡が多くなりました。千葉市出洲地先では明治43年(1910年)に都川河口及び全面水域を浚渫し、船溜まりを設け、民間資本でこの船溜まりに沿い11万㎡の出洲埋立地を作り、荷上場を移して港湾としての初期整備を行い、現在は千葉港(左図参照)の一部として、京葉臨海地域の発展を遂げました。